これまでと、これからの私

私は自分の性格がよくわからない。時に、そんな自分に嫌気がさすことだってよくある。飽き性で、典型的なO型タイプ。おおざっぱでありながら、変なところで神経質。無駄に強がりで、プライドも高い。怒られたりすることもほぼなく、次女という特権から甘やかされて、わがままに育ったように思う。

小さいころ

小さいころは死んだようによく寝て、人の分までよく食べ、よく泣き、すぐ熱を出し、どんくさいから怪我ばかりする危なっかしい、世話のかかる子だった。自転車に乗れば壁にぶつかって顔中血だらけ。ほうきを持てば落ち葉ですべって十針縫い、跳び箱をすれば首の骨にヒビが入り…怪我のたびに学校から幾度となく呼び出される親は、いつも気がかりだったと思う。

遠足で拾ってきたドングリと一緒に寝たら、なぜか鼻に詰まって取れなくなって夜中に救急病院に行くという、そんな出来事もたびたび…。良く言えばがんばり屋さんだが、いうならば、自分の限界を知らずに無茶をする子だった。保育園では、何事もだれよりも早く、上手にできないと気がすまないタイプだった。コマまわしや竹馬も、人一倍練習して一番にできるようになった。

小学校

小一から塾に通うようになった。そのおかげで、小学校の授業はとても簡単。だからテストも100点が当たり前で、1問でも間違えるとすごく悔しかった。いわゆる、〝できる子〟でいることが自分のポリシーというような感じだ。得意な教科の勉強が好きで、勉強だけは飽き足らず、学級委員や生徒会の委員も務めた。このころの私は、常に周囲から目立つ存在でいること、誰かに頼られるのが好きだった。

とはいえ、親が教育熱心というわけでもなく、習い事を強いることも一切なかった。むしろ、「塾なんて行くの？　大変じゃないの」というくらいだった。私は親から、「真理子はがんばり屋さんだね」って言われるのが嬉しかったのかもしれない。常に周りの友達よりも上に立っていることで、優越感みたいなものを感じ、いろんなことをやった。

小学校高学年になると、塾の授業に比べたら学校の授業なんて簡単すぎて、アホらしいと感じ、ますますみんなと違うことをしたいという思いが強くなっていた。みんなが進学する地元の公立中学はセーラー服。「みんながセーラーなら、私はブレザーを着たい！」と思い、頑張って中学受験をした。ちょっと背伸びをしてメイクをしてみたり、携帯を持ち、ブランドの服を着たてみたり…。みんなと同じことをするのが、とにかく嫌だった。

中学受験のために、夏休みは塾で1日10時間の特訓授業。小学生のくせに、講習に励み夜中の1時まで勉強していた合宿

…。しかし、これもすべて自ら行くと決断した。塾の熱血講師と共におそろいのTシャツに、頭にはハチマキを巻いて意気込んでいた。今考えてみればすごくアホらしい。そんな姿に親は、「大丈夫？」といつも心配していた。頑張って勉強し、希望の中学校にも無事合格。ものすごい倍率の中、戦いを勝ち抜いたが、その中学に入ったことで私の人生は大きく変わった。

中学校、高校

同じように勉強をして受験を突破してきた子の中に混じれば今までの、「優秀な子」から一転、「普通の子」になった。進学校だったこともあり、常に先取りの内容の勉強は難しく、とてもついていけなかった。私立の中高一貫の、高校生までいる学校で、優秀な先輩、きれいな先輩にも圧倒された。初めは勉強も必死にがんばっていたけれど、学年が上がるにつれて諦めはじめた。

テストの結果はうしろから数えた方が早いし、国語以外の教科はほぼ下のクラス、常に補習メンバーに仲間入りした。頭が悪いクラスは恥ずかしいけれど、「馬鹿」の中にいるのは楽だし、楽しかった。学校では「馬鹿」でも、学校をでれば制服を着ているだけで「賢い」という目で見られる。それだけがわずかに残った唯一のプライドだった。なんやかんやと開き直っていても、結局常に、「良いように思われたい」と、世間体などの人の目を気にしていた。

生活面でもどんどんひどくなっていった。学校では、「スカートは膝丈、白靴下で、化粧・染髪・アルバイトは禁止…」といった数えきれないくらいの厳しい校則があって、そのたくさんの校則がのった分厚い手帳を常に携帯させられた。にもかかわらず、スカートを短くして化粧をし、毎日怒られ化粧落としと、除光液をもった先生に追いかけられた。職員室で怒鳴られ、面談室に呼び出されては怒られることもしょっちゅうだった。

他校から、「頭は良くても、デブとメガネしかいない」と言われるぐらい、本当に地味な学校だったから、校則を破って遊びほうけている私や、その友達は少数派でかなり浮いていたし、同級生や後輩には、かなりびびられていた。拘束されるのなんて嫌だし、自分の好きなようにしたいという思いもあったけど、それ以上に目立つ存在でいることが、やっぱり重要だったのかもしれない。

学校生活以外も、禁止であるバイトをしたり、夜遊びしたり。理想の男性は、年上でお金があって、いい車に乗ってて、背が高いというのが「いい人」の基準。性格がどうか、好きかどうかなんて考えていなかったから、当然、男関係もグダグダで最悪な生活を送っていた。

幸いにも、お金と住むところには困らなかったから、しょっちゅう家出して、まさにやりたい放題だった。しかし好き放題していたといっても、別に親や家族との仲が悪いわけではなかった。むしろみんな本当に仲がよく、家が大好きだ。それなのにわざわざ非行をしていたのは、いままでのように、「優秀ないい子」を演じれなくなったから、「悪さ」で目立つことで、周りの目を引こ

うとしていたのかもしれない。

大学受験

しかし、高3ぐらいになって、そんな自由でテキトーな生活にも飽きてきた。仮にも〝進学校〟と呼ばれるところにいるわけで、一歩学校に入れば、〝勉強だけに生きてる〟そんな人たちばかり。でも受験といっても、別にこれといって将来の目標はないし、行きたい学校もない。けれど、「一発勉強でもしてみるか」と思うようになった。軽い気持ちで勉強を始めたけど、「やったら私はできるんだ、今まではやらなかったからできなかっただけ」と自分に変な自信があった。

私の変な過信とともに、案外すぐに結果がでてきた。すぐに調子にのった私は、かなり偏差値の高い難関校を目標に、毎日朝から晩まで塾に引きこもり、ファミレスやカフェでも勉強した。なんでいきなり火がついたかのように勉強し始めたのかは自分でもよくわからない。本当に思いつきだった。自分なりにかなり頑張ったが、結局受験は失敗、志望校にはいけなかった。所詮、数か月頑張ったところで、ずっと必死に勉強してきた他の受験生には勝てなかった。当然の結果。

そのときになってやっと、自分の考え方の浅はかさを思い知った。同級生のほとんどを、「先生と親の言いなりで勉強しかしていない人間」、「まじめなことは、恥ずかしい」と馬鹿にしていた。しかし考えてみれば、それはいわゆる負け惜しみでしかない。自分ができなかったこと、常に大変なことから逃げて、それを正当化していただけの私の方が、よっぽど馬鹿だとやっと気づいた。

その半面、「受験勉強を始めたのが遅かったし、しょうがない」、「精一杯頑張ったからそれでいい」と、まだ自分のわずかなプライドを守ろうとする気持ちもあった。負けず嫌いな性格から、「大学を滑った」ということよりも、「自分の思うようにいかなかった」ということが、私にとって大きく、許せなかったのかもしれない。言うほどたいして苦労もしていなかったけれど、「二度とこんな失敗はしない」と強く思い、この大学受験が私の考え方や意識を変えるきっかけとなったように思う。

大学生活

大学に入ってからは、いろんなことに挑戦し後悔だけはしないように、卒業するときに自分にとって〝なにか〟プラスになるようにしようと思った。将来の選択肢を広く持とうと教職も取り、毎日朝から授業をフルでとったり、秘書検定などの資格に挑戦したり、講習で二十時まで学校にいることもよくあった。高校よりも授業を詰めていた気がする。

中高での六年間は、深く狭い交友関係で育ったため、大学で新たに信用し、心から打ち解けようとする友達を作ろうとは思えず、浅く適度な距離をもって、気軽に友達と付き合った。大学の友達は全然授業にこないけど、もともと群れるのが好きではないから、一人で授業にでるのも別に平気だったし、出席をとらない授業もきちんとサボらず受けた。忙しいことに、次第

に優越感みたいなものを感じるようになった。
この頃から日常生活もすごく変わった。バイトをして貯金もし、夜遊びもそこそこに、毎日きちんと家に帰り、金髪やケバくて、濃いメイクもやめて、すっかり落ち着いた。いわゆる〝ギャル〟と言われる見た目の皮を脱いでみたら、まじめに何かに取り組むことが恥ずかしいと思わなくなり、いろんなことに挑戦してみようと、前向きな気持ちを持てるようになった。

姉の存在

小さい頃から負けず嫌いで、なんでも一番にこだわろうとしていた性格は、二つ年上の姉の存在が大きく影響しているようにも思う。姉は穏やかで、マイペース。何をするのも遅いし、時間にはルーズで私とは真逆の性格。私は背が高く母親似なのに対し、彼女は背が低くて父親似、といったように性格だけでなく外見も全く違う。

多くの子が、「おねえちゃん」の真似をして大きくなっていくが、うちは違う。基本的になんでもキチンとやらないと気が済まない、しっかり者の私は、必然的にいつもやることが姉より早い。「真理子の方がおねえちゃんみたいだね」と言われるようになり、それがうれしかった。誰かに比べられたわけではないのに、姉より背が高いこと、勉強を頑張ること、走るのが早いこと、片づけができること、お手伝いをすること。すべてに関して、「姉よりできる」ということが当たり前になっていった。

しかしマイペースで、いつもぼーっとしてるけれど、こんな姉は私の憧れでもある。姉は、小・中と公立の学校へ行き、高校も決して頭が良いとは言えない学校で楽しくのんびり過ごしていた。子供が好きで、「保育士になりたい」と小さいころからきちんと自分の夢を持っていた。高校までのんびりと自由に遊び、保育の短大へ行き、今は毎日元気に保育園につとめている。無駄な勉強はせず、必要最低限の勉強だけをして、大学も推薦で苦労もせずさっさと入学。

目標や夢のない私にとっては、決して賢くはないけれど、きちんと夢をもち、それにまっすぐな姉がずっと羨ましかった。変に人と張り合ったり、意地をはったりせず、素直で、私にはないものをもっている。だからこそ姉より優れている〝何か〟が欲しくて、必死に一人で張り合っていたのだと思う。

金銭感覚

昔から、親・祖父母からはたくさんのお金を与えられていた。バイトは遊び感覚で、遊ぶお金に困ることはなかった。友達も裕福な子が多かったから、「好き放題お金を使うこと」、「お金があること」に何の疑問も感じることもなかった。ブランド志向で、ホテルなどでのパーティもたびたび。完全に金銭感覚は狂っていた。

しかし大学に入り、周りを見れば、生活のため、遊ぶため、みんな必死でバイトしていて、中には奨学金をもらったり、学費まで自分で払ったりしている子がいて、驚いたと同時に、自分が少しはずかしくなった。私は、バイトで月に十万以上稼いでいて、

実家暮らしにもかかわらず、今でもお小遣いをもらい、ご飯代や洋服代、定期代、携帯代から化粧品…すべて与えられている。そして、ボーナスまでもらっている。それでも親は、「お金はあげるからバイトなんてしないでいい」という。

そんな親に感謝はしつつも、このまま甘えてばかりいてはいけないと思い、目標をたてて貯金をするようになった。バイトもお金のためだけではなく、やりがいを感じるようにもなった。貯めたお金で車校に行ったり、短期の留学の費用にあてたり、これからも自分のためになるようなことに使っていこうと思っている。

そしてこれから

二十歳の今、ふりかえってみると、自分のことってわかっているようで、やっぱりわからない。失敗やうまくいかなかったこともたくさんあったけど、不思議と、「あのときこうすればよかったのに！」という後悔の気持ちはない。いままで人から評価されること、なんに関してもずっと人と比べることばかりしていたが、大きくなるにつれ、「自分にとって何が大切か、何をすべきか」ということを第一に考えられるように変わってきた。これから就職活動もはじまる。今まで自分が何を努力してきたか、これからどんなことをしていきたいか、自分の長所・短所は何か、問われることも多くなる。性格や、今までの自分の失敗も含め、それを受け入れながら、プライドの高い自分とうまく向き合い、胸を張って夢や目標を語れる、そんなすてきな女性になりたいなと思う。